

27	田原	田原市立 田原中部小学校	トミダ ユミ 名前 富田 優美
分科会番号	1	分科会名	国語教育（文学その他）

研究題目 描写をもとに人物の心情を読み取り、自分事として捉える子の育成

— 6年国語科「模型のまち」の実践を通して—

1 はじめに（主題設定の理由）

本学級の児童は、1学期に学習した物語文『さなぎたちの教室』で、誰に対しても心を開くことができなかった中心人物が、登場人物との関わりを通して徐々に心を開き、前向きな気持ちに変容していく心情を読み取ることができた。また、中心人物の不安な気持ちや心細い気持ちに共感を覚え、前を向いて進み出す姿に勇気をもらったようであった。この単元を通して、児童たちには、人物同士の関係から心情を想像し、中心人物が変容したことに気付く力、物語内の事象と自分の生活の類似点や共通点を探すことのできる力があると考えられる。

しかし、児童たちは読み取った心情を友達に説明する際に、「なんとなく仲良くなった気がする。」や「明るい雰囲気を感じた。」など、根拠を明確にせず、想像だけで心情を考えてしまうことがあった。これは、描写や表現が人物の心情を表していると理解できていないことや、心情に関わる描写を探しきれていないことが要因であると考えられる。そこで、描写を根拠として人物の心情を読み取ることのできる子を育てたいと考えた。

また、児童たちは登場人物に対して、中心人物と自身の類似点や共通点を探すことができるものの、物語は物語、自分は自分と、授業で感じたことや考えたことを、自身の生活や行動に活かそうとする姿はほとんど見られなかった。例えば、4月当初、自分から友達に話しかけられず、友達関係に悩む姿が見られた。そんな中「さなぎたちの教室」の学習では、中心人物が勇気を出して、自分から友達に話しかける姿やその心情を読み取ったが、この学習を終えた後も、友達との関係作りに活かそうとしている様子はあまり見られなかった。これは、物語の事象を自分の生活や経験とつなげて考えることができていないからだと考えられる。そこで、物語で読み取った事象を自分事として捉え、自身の生活や経験に活かすことのできる子を育てたいと考えた。

以上のことから、児童たちに描写をもとに人物の心情を読み取り、自分事として捉えるようになってほしいと考え、研究主題を設定した。

2 研究の仮説と手立て

研究主題にせまるために、以下の2つの仮説と4つの手立てを設定した。

【仮説1】

友達同士で心情につながる描写を確認し合ったり、キーワードの表現の違いを話し合う活動を設定したりすれば、描写や表現の工夫を根拠に人物の心情を読み取ることができるだろう。

手立て1 毎時間の授業で、心情につながる描写を確認し合うペア読み活動

各場面の中心人物の心情の変容を捉える学習では、ペア読み活動を取り入れる（資料1）。ペア読みを毎時、継続して行うことで、人物の

資料1 【ペア読みの流れ】

- ①ペアで場面の音読
- ②個人で中心人物の心情を表す描写に線を引く（一人読み）
- ③ペアで線を引いた部分の確認をする
- ④線を引いた理由をペアで話し、納得できれば加筆する

言動や様子、情景の描写が心情の変化の根拠になることに気付くことができると考えた。ペア読みをすることによって、読み取りが苦手な児童でも、考えを広げられるだろう。

手立て2 キーワードの表現の違いを話し合う活動

本教材では、物語内に何度も出てきている「ビー玉」や「模型のまち」、「あのまち」、「このまち」という言葉が中心人物の心情に関わるキーワードとして存在する。これらのキーワードの物語における表現の違いに着目し、それぞれの表現から感じられることをグループや全体で話し合う。そうすることで、表現の工夫の効果を感じたり、中心人物の心情の変容に気付いたりすることができると思った。

【仮説2】

中心人物になりきって振り返りを書いたり、その後自分の言葉で表現したりする場を設定すれば、中心人物の心情を自分事として捉え、学校生活に活かそうとすることができるだろう。

本研究における「自分事として捉える」とは、児童が自分自身の生活や経験と結び付けて、「自分ならばどうするか」と主体的に考える姿のこととする。

手立て3 中心人物になりきって書く振り返り日記

中心人物が転校初日に感じていた「ひろしま」や戦争に対しての認識は、現代を生きる児童に通じるものがある。そこで、児童が「ひろしま」や戦争を中心人物視点で捉え、それらに一步近づいて考えたり、感じたりするために、中心人物の気持ちになりきって日記を書く活動を設定する。この日記を書くことで、戦争に対する中心人物の気持ちを自分事として捉えることができるだろう。

手立て4 書きためた日記を活かし自分の言葉で表現する場の設定

書きためた日記を一つの用紙にまとめ、それをもとに、物語を客観的に見て全体の流れをつかむ。そうすることで、中心人物の心情や認識の変容、さらに見方・考え方を読み取り、全体像を想像することができると思った。最後に、読み取ったことを表現する場として、学芸会で「模型のまち」の劇を行う。「模型のまち」の劇作りでセリフや表現の仕方を自身で考えることで、読み取った心情や自身の考えを活かしていくことができるだろう。

3 抽出児童の設定

児童Aを抽出児童にして、学習の様子やワークシートの記述から変容を追うことで、手立ての有効性を検証していく。

【抽出児童Aの実態】（以下A児とする）

◎文章の構成や展開についてよく理解し、読み取ったことをまとめることが得意である。中心人物の各場面の行動や様子を表に整理し、物語の流れをつかむことができる。

◎単元の主題を読み取り、それに対しての自分の考えをもつことができる。

△根拠をもって人物の心情を想像することが苦手である。

△物語の内容と自身の生活を繋げて考えることが苦手である。

【抽出児童Aにかかる教師の願い】

描写をもとに人物の心情を読み取ったり、物語内の事象を自分事として捉えたりすることで、学んだことを活かしながら、学校生活で自身の考えを表現してほしい。

4 研究の実際と考察

(1) 仮説1に対応して

①毎時間の授業で、心情につながる描写を確認し合うペア読み活動（手立て1）

ペア読み活動を毎時間の授業で取り入れ、授業の進行をパターン化することで、児童は授業に見通しをもつことができた。ペアでの音読では、児童たちは教科書と鉛筆を持ち、向き合って音読を行う（資料2）。これは、音読をしつつ、心情につながるとされる描写にチェックを入れていくためである。この形を取ることによって、児童が一人読みで描写に線を引く際に、改めて最初から読み直す必要がなくなったり、どこを読んでいるか見失ってしまったりせず、集中して読むことができたりするようになった。心情につながる描写を見つけることに苦手意識をもつA児も、ペア読みで同じ箇所にも線を引いていることが明らかになると安心して様子であった。また、線を引いた理由を説明したり、聞いたりすることによって、自分の言葉で描写と心情のつながりを表したり、自分では気付かなかった心情描写に出会ったりすることができた。

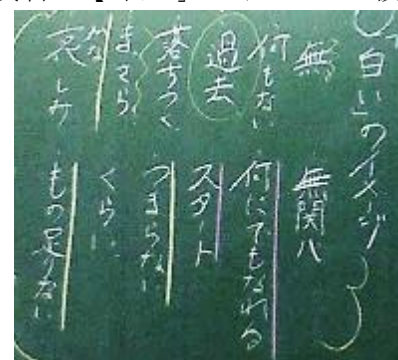


第6場面の夢の中での描写では、多くの児童が「ビー玉」や「模型のまち」の描写について線を引いている姿が見られた。「模型のまち」の表現が、第4場面と第5場面で変化していることに気付いたA児は、「夢の中の『模型のまち』は『白い模型のまち』の真逆だと思う。その『模型のまち』を見ている亮の気持ちは絶対変わってるよ。」とペアの子に説明をすることができた。その説明を聞いたペアの子は納得した様子であり、その箇所にも線を引いた。これは、A児が描写に着目をして、表現の違いを根拠にその効果を考えた成果であると考えられる。また、ペアが納得したことで自信がついたのか、全体共有の場でも同様の説明をすることができた。毎時の授業でのペア読み活動は、心情の変容の根拠となる言葉に気付くことや気付いていなかったことに考えを広げるきっかけとなった。

②キーワードの表現の違いを話し合う活動（手だて2）

第4場面の授業では、「白い『ひろしま』を亮はどう思っているか」という課題で、「模型のまち」の「白い」という表現に着目して考えた。「白い」という描写について、「白い」のイメージを考え、話し合った（資料3）。多くの児童が「白い」に、「哀しみ」や「物足りなさ」などのマイナスなイメージをもっていることに対して、A児は「何にでもなれる」「スタート地点」というプラスの捉えをしている。この捉えについて、なぜA児はこのような考えたのかを問い返したところ、A児は、「一番最初の授業で今の平和記念公園を見たとき、平和そうで、ここからちゃんと復活すると思ったから。」と答えた。現在の平和記念公園の様子を鑑みながら、過去の様子や状況について考えようとする姿が見られた。

資料3 【「白い」のイメージの板書】



第4場面の「模型のまち」の「白い」という表現に対して、第5場面では「色がある」という表現になっている。そこで、「模型のまち」に「色がある」のはなぜ、という課題でグループでの話

し合い活動を行った。その際には、前時で行った「白い」のイメージと比較して考えることを伝えた。A児のグループでは、「亮やかっちゃんの感情があるから」や「人が本当に住んでいたとわかった、想像できたから」という考えがあがった（資料4）。「色がある」という表現によって、中心人物は「人の存在感」や生活の「現実味」を感じることができたようであった。キーワードの表現の違いに気付き、それを比較する話し合い活動を行ったことによって、中心人物の心情の変容を捉えることができた。

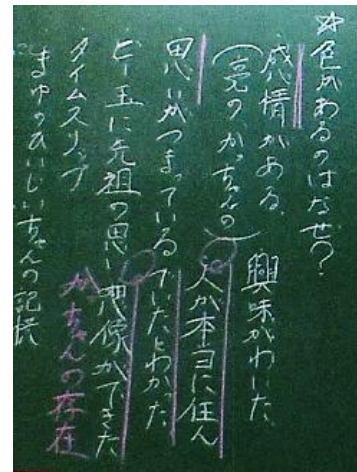
（2）仮説2に対応して

③中心人物になりきって書くふり回り日記（手立て3）

導入の場面では、実際の「ひろしま」の平和記念公園の写真を見せた。写真を見た児童たちは、「気持ちよさそう。」や「自然がたくさんあって涼しい感じ。」「田原にも似たような場所があるね。田原の公園かな？」との発言があった。また、川を挟んだ先にある住宅街の写真も合わせて見せ、「こっちには人がたくさん住んでいそう。」との発言があった。その後、写真の場所が今の広島県であり、原子爆弾が落とされた平和記念公園であることを伝え、「ここに実際に落とされたのだけれど、どう思う？」と問いかけた。すると、平和記念公園を訪れた中心人物が、最初に抱いた感想とほとんど同じ意見が出てきた（資料5）。児童たちの発言から、中心人物と同様に、今の児童たちにとって戦争や原子爆弾は遠い過去の話であり、知識や興味が希薄であることがうかがえた。初読のA児の感想からも、中心人物と自身の考え方や認識が似ていると考えていることがわかる（資料6）。また、他の児童にも同じような感想が見られた。そこで、中心人物の気持ちになりきって日記を書くことで、中心人物の考える「ひろしま」「戦争」について自分事として考える活動を手立てとした。

ふり回りとして中心人物になりきって日記を書く際は、授業内で扱った内容を根拠としながら、中心人物の心情や認識を読み取り、想像して書くことを重視した。第4場面では、前述したように、児童たちがもつ「白い」のイメージについて話し合い、考えた。イメージとしてあがった「過去」という言葉から、A児はふり回り日記で「色は絶対にぬらずに白い模型を展示した。白いを表すのは過去のひろしまを伝えるため」と記述した。（次頁資料7）。このことから、A児が「白い」に対しての自身の考察を入れながらも、模型づくりを行う中心人物になりきりながら読み取る学習をすることができたことがわかる。

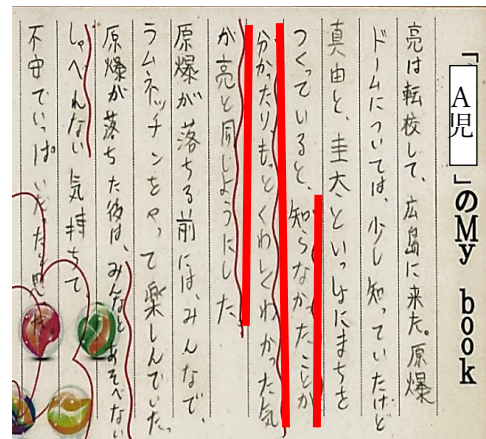
資料4 【「色がある」理由の板書】



資料5 【導入部分での会話】

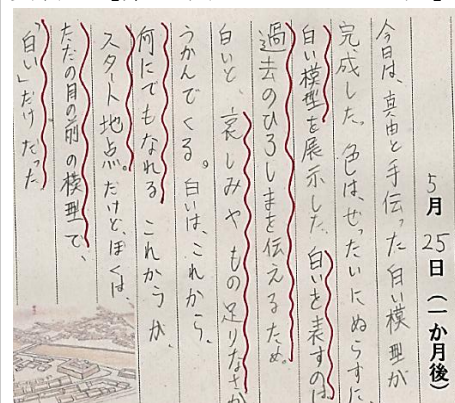
- T:ここに実際に落とされたのだけれども、どう思う？
- C1:まだましなんじゃない。
- T:まだましってなんで？
- C2:住宅街だと人が多いから。
- C3:被害が大きいし、犠牲者もたくさんでる。
- C4:こっちに落とされてよかったよ。
- C2:いや、落とされることはよくないけどね。

資料6 【A児の初読のふり回り】



単元のまとめでは、「自分が今住んでいるところには」と、自分の生活とつなげて考えている記述が見られた(資料8)。これは、物語内の中心人物の心情や認識に共感したり、自分とつなげたりして、単元の内容を自分事として考えることができていると思われる。また、ふり返りの中には、「亮と同じように考えて」という記述が数か所あった。中心人物になりきって考えを書いたことがわかる。以上のことから、中心人物になりきって書くふり返り日記は、単元の内容を自分事として捉えることに有効であったと考える。

資料7【第4場面のなりきり日記】



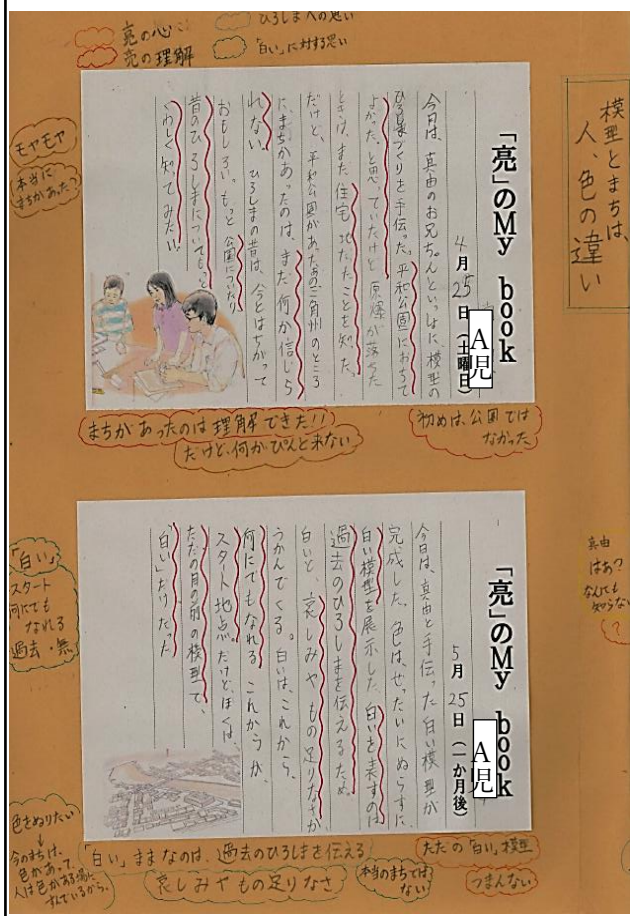
④書きためた日記を客観的に見て、自分の言葉で表現する活動(手立て4)

ふり返り日記では、各場面での中心人物の心情を描写から捉えることができた。しかし、各場面ごとのつながりや中心人物の心情や認識の変容など、物語の全体像を想像することはできない。そこで、書きためた日記を一枚の画用紙に貼り、物語の流れを客観的に見て、全体像を想像する活動を行った。児童たちは、日記を並べて一つにまとめることで、各場面で何があったのか、読者視点で客観的に、分析したり、考察をしたりすることができた。A児は第5時のふり返り日記に、「白いと、哀しみやもの足りなさがうかんてくる」と記述している。しかし、日記の周りのメモの中には、「本当のまちではない」や「色をぬりたい→今のまちは、色があつて、人は色がある場に住んでいるから」という記述がある。これは、中心人物になりきって書いた日記を客観的に読み、白い「模型のまち」はあくまで「模型」であり、人の存在を感じられない「にせもののまち」とであると分析することができたからである。中心人物の心情や認識の変容を追い、全体像を想像することで、A児は「戦争」や「原子爆弾」に対しての自分の考えをもつことができ、物語全体にある表現の工夫についても自分なりの分析をしている(資料9)。物語内で使用される「ひろしま」がなぜひらがなのか、その表現に当初より疑問をもっていた

資料8【A児の単元のまとめ】

確かに、自分が今住んでいるところが、元々住宅で、爆弾が落ちて公園や学校があったかもしれないと思うと亮と同じように驚く。(抜粋)

資料9【A児の日記をまとめた画用紙】



A児は、心情を表す描写で扱った「白い」の意味に着目し、その疑問に対しての自分なりの考え

を、自分の言葉で友達に伝えることができた。A児が、「白い」と「色がある」ことの違いを分析し、それを疑問の解決につなげていることがわかる。

単元のまとめとして、学年で「模型のまち」を題材にした学芸会の劇を作った。その際、児童自身がセリフの言い方や動きを考え、台本を作り上げた。A児は中心人物の役を演じた。A児が演じた場面は、中心人物が夢の中で体験した出来事や夢の中で出会った人物たちを思い返す場面である。最初に用意していた台本では、「亮：これ、かっちゃんのだ。これがかっちゃんたちが生きていた証なんだ。」というセリフであった。しかし、練習の際にA児は、「このビー玉、かっちゃんたちと遊んだときのものだ。かっちゃんは本当に生きていたんだ。」というセリフに変えたいと申し出てきた。理由を聞くと、A児は「亮は夢から覚めたとき、かっちゃんたちが本当にいたかどうかわかっていなかったけれど、ビー玉を見て本当に生きていたとわかったと思うし、嬉しかったと思うから。」ということであった。このことから、「自分が亮だったらどう思うか」と考え、自分の言葉で表現しようとしたことがわかる。これは、学習した内容を学校生活に活かした姿である。以上のことから、書きためた日記を客観的に見て、自分の言葉で表現する場の設定は、自分事として捉えたことを、学校生活に活かそうとすることに有効である。

5 成果と課題

(1) 仮説1について

ペア読みを毎時継続して行ったことによって、心情描写を探すことに苦手意識をもっている児童も、ペアで確認しながら取り組み、安心して活動に臨むことができた。また、自身の考えに自信をもって発言する姿も多く見られるようになった。キーワードの表現の違いを比較し、話し合う活動では、表現の工夫が中心人物の心情の変容にどう関わっているのか、どのような効果をもたらしているのかを、A児を含め、多くの児童が考える姿が見られた。

(2) 仮説2について

児童が「戦争」や「原子爆弾」について自分事として捉えるために、中心人物になりきって日記を書く活動では、中心人物の言動や様子を根拠としつつ、「自分が亮であつたら」と考えて書くことができた。学芸会で「模型のまち」の劇を発表した児童の感想では、「戦争のことを全く知らなかったけれど、歴史の授業でしっかり学びたいと思った」や「年下の子にも伝えていくことが大切だ」というものがあつた。中心人物の視点から過去にあつた出来事について考えることや、それを表現する場を設定したことで、自身の学校生活に活かそうとする姿が見られた。

(3) 課題

話し合い活動では、児童主体で行うために、児童の相互氏名で話し合いを進めた。それによって、学習課題から逸れていってしまったり、空想論になってしまったりすることも多々あつた。教師が児童の話し合いの勢いや流れを止めず、どのタイミングで、どのように軌道修正をするべきかが今後の課題である。授業によっては、教師が内容の焦点化をすることも必要であると感じた。中心人物になりきって書くふり返し活動では、友達との共有の時間において、友達のふり返しを読むだけにとどまり、自分の考えに付け足したり、考えを改めたりすることはほとんど見られなかった。ふり返しを友達と読み合うだけでなく、お互いにそのふり返しに対してコメントをしたり、自分のふり返しを見直す時間を設けたりすることの必要性を感じた。

課題を踏まえ、叙述をもとに人物の心情を自分事として捉え、自分の言葉で表現できる子の育成ができる実践を今後も進めていきたい。